書誌から見た昭和時代（戦後）のワイルド受容――三島由紀夫を中心に――

佐々木　隆

2006年4月
日欧比較文化研究　第5号
日欧比較文化研究会

書誌から見た昭和時代（戦後）のワイルド受容
——三島由紀夫を中心に——

佐々木　隆

プロローグ

昭和時代も戦後(1945年8月16日～1989年1月7日)になると、まずは 国の復興が最優先となった。かつて、明治時代の西欧化の時期にも、殖産工業を中心に物質文明主義が世の中をつき動かしていた中、物質文明ではなく人間の精神面を重視し、芸術至上主義のワイルドが本間久雄を中心に紹介された。同様に昭和30年代はまさに、戦後の復興期と高度経済成長期という物質面が優先する時代の中、ワイルドが脚光を浴びた。ワイルド没後 50 周年の1950年（昭和25）には三島由紀夫「オスカア・ワイルド論」(『改造文芸』第3巻第4号）以後、ワイルド没後75周年の1975年（昭和50）には日本ワイルド協会の設立をはじめ、1980年（昭和55）から翌年にかけて、また1988年（昭和63）から翌年にかけて西村孝次が2度にわたり個人訳の全集に挑んだ。この間には『サロメ』を中心に舞台でもワイルド劇が取り上げられるようになった。また、大学の研究紀要にワイルドに関する多くの論文が寄せられるようになったのも戦後からのことである。1951年（昭和26）には田下優「ワイルドの仮面」(『女子大文学』第1号)、藤井義久「ワイルド新考察」(『同志社女子大学学術研究年報』第2号)、1952年（昭和27）には小滝奎子「オスカー・ワイルドに於ける芸術と人生」(『関東学院女子短期大学論叢』第1号）をはじめ、大学の紀要論文でも毎年ワイルド研究、ワイルド論が発表されているのである。さらに注目しておきたいのが、雑誌・定期刊行物における特集である。特に、『ユリイカ』（青土社）では 1975 年（昭和51）5月（第8巻第5号)、1980年（昭和55）9月（第12巻第

10号)、1990年(平成2)5月(第22巻第6号)、2000年(平成12)4月(第32巻第6号)と戦後4度もワイルド特集を組んだのである。

本稿では戦後の上演を意識しながら、特に、三島由紀夫(1925-1970)を中心に取り上げる。

1　ワイルド劇上演

昭和戦前には上演の記録を見つけることはほとんどできなかったが、戦後になると、三島由紀夫のワイルド劇上演と近代座によるワイルド劇上演、オペラのワイルド、五十田安希によるひとり芝居によるワイルド劇上演などが舞台に登場することになった。戦後初めてのワイルド劇上演として記録に残っているものは、1954年(昭和29)の民芸による『幽霊やしき』である。これは『カンタヴィルの幽霊』の翻案である。もともとは、1951年(昭和26)12月の『少年少女』(第4巻第12号、中央公論社)に福田恆存(絵:島村洋二郎)「(喜劇)幽霊やしき」として掲載されたものである。

> これはお芝居ですから、もちろんつくりごとです。イギリスにオスカー・という小説家がいます。いまから五十年ばかりまえに死にましたが、そのひとの書いた詳説に、「カンタヴィル邸の幽霊」というのがあります。わたくしはそれを読んで、とてもおもしろく感じ、なんとかして、みなさんに見ていただきたいとおもっていました。そして、ようやくその機会ができたわけです。原作はイギリスのお話ですが、わたくしは現代の日本風俗になおして書いてみました。(1)

その後、1955年(昭和30)3月の福田恆存『龍を撫でた男』(新

潮文庫）に収録されている。巻末には三島由紀夫の解説もある。「幽霊やしき」と「カンタヴィルの幽霊」については、1996年（平成８）３月の堀江珠喜「『カンタヴィルの幽霊』の脚色――日本の比較」(『英米言語文化研究』第45号、大阪府立大学英米言語文化研究会）が詳しい。なお、1960年（昭和35）の三島由紀夫演出『サロメ』（文学座）については後述する。

1973年（昭和48）には近代座（荒井良雄訳・演出）による『真面目が肝心』(砂防会館ホール)、『フロレンスの悲劇』(自由劇場)、『聖なる娼婦』(自由劇場）が上演された。その後は日本のひとり芝居の先駆者である五十田安希が『サロメ』やワイルドの名言集『オスカリアーナ』を上演している。

ワイルド劇上演の特徴として、『サロメ』の場合はオペラ上演があげられる。さらに上演も多様化し、1972年（昭和47）にはモーリス・ベジャールによるバレエによる『サロメ』上演も行われた。また、1973年（昭和53）には長嶺ヤス子、ホセ・ミゲルによるフラメンコによる『サロメ』も上演された。（ワイルド劇上演については佐々木隆「劇上演記録」、山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月を参照のこと。）

2　三島由紀夫のワイルド論

三島由紀夫はワイルド没後50年の1950年（昭和25）に「オスカア・ワイルド論」(『改造文芸』第３巻第４号）を発表し、1960年（昭和35）の文学座による『サロメ』上演では演出を担当した。2000年（平成12）はワイルド没後100年であると同時に三島由紀夫没後30年にもあたる年となり、ワイルドや三島が注目を浴びることとなった。ふたりの接点がここでひとつになったのである。

三島がワイルドを知るようになったのはいつ頃だろうか。三島

は1950年（昭和25）に「オスカア・ワイルド論」（『改造文芸』第3巻第4号）を発表した。その中で

> 私がはじめて手にした文学作品は「サロメ」であった。これは私がはじめて自分の目で選んだ自分の所有物にした本である。この選擇には言ふまでもなくビアズレイの挿絵があづかつてゐたが、ビアズレイを選ぶことと、「サロメ」を選ぶこととの間に、そもそおどれだけの逕庭があろうか。そこに明證と呈示してゐる一時代の雰囲気を私は躊躇なく選びとったのではあるまいか。(2)

と、『サロメ』との出会いを記している。1956年（昭和31）に発表した「ラディゲに憑かれて――私の読書遍歴」（『日本読書新聞』2月20日）でも、11、2歳の頃に『サロメ』を自分で選んで買った本として、「雷に搏れたやうに感じた」「悪は野放しにされ、官能と美は解放され、教訓臭はどこにもなかった」と回想している。(3) さらに、13歳の時には、「キーツの墓」という短詩も読んでいる。

1998年（平成10）の安藤武『三島由紀夫の生涯』（夏目書房）によれば、1949年（昭和24）1月9日に木村徳三宅に三島が訪れ、その中でワイルドやヴェルレーヌが話題になったことが紹介されている。(4) 三島が創作に専念して、7月には『仮面の告白』を発表した年である。また、同書の中でオスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』を20歳代に読んだことも紹介されているのだ。(5)

三島は少年時代はラディゲの『ドルジェル伯の舞踏会』、ワイルドの『サロメ』を愛読し、かたわら詩を書く多感な少年であったという。(6) 1952年（昭和27）の『アポロの杯』（朝日新聞社）

では、同年1月にニューヨークのメトロポリタン歌劇場でリヒャルト・シュトラウスの『サロメ』を見ていることも書かれている。1951年（昭和26）に朝日新聞社特別通信員の資格で、北米、南米、欧州に出掛け、翌年に紀行文集としてまとめられたのが『アポロの杯』である。1957年（昭和32）に『近代能楽集』がドナルド・キーンにより *Five Modern No Plays* として英訳されて、クノップ社より刊行されたのを契機として、三島は同社の招きで渡米した。さらに、オフ・ブロードウェイで上演されるという話もあり、しばらく滞在を延ばしていたが、結局、上演はなく、ニューヨークをあとにした。三島はアメリカのあと、スペイン、ローマ、ギリシャ経由で翌年1月に帰国したのである。(7)

三島の最もまとまったワイルド論、「オスカア・ワイルド論」（『改造文芸』第3巻第4号、1950）を少し詳しく見てみよう。

> すでに時代の流行を離れ、狂熱の追随から置いてけ堀を喰ったワイルドの名が、永いあひだ私の関心からは立去つてゆかなかつたが、正直に言ふと、アルフレッド・ドゥグラス卿の事件への関心が、そのいちばん頑固なきづなであつたかもしれないのである。(8)

「オスカア・ワイルド論」の冒頭であるが、三島がワイルドとアルフレッド・ダグラス卿との交友関係に関心を持っていたことが大きな理由として取り上げられたことは注目に値する。さらに『サロメ』との出会いが紹介されている。三島はこの「オスカア・ワイルド論」でワイルドの希臘への傾倒に注目し、その契機としてワイルドは「希臘に旅してヘラスの美に開眼した」(9)と捉えたのである。三島はこのワイルド論を書いた翌年に欧州に出掛け、1957年（昭和32）にはギリシャを訪問していることも付け加えておき

たい。三島は後半で『獄中記』について次のように記している。

「獄中記」には悲哀といふ主題を、「人生に於ても藝術に於てもその最後の原型」と考へてワイルドが居るのである。(10)

三島が 1951 年（昭和 26）3 月に『文芸』（第 8 巻第 3 号）に寄せた『完本獄中記』への書評では次のように記している。

流布本獄中記の主人公はオスカア・ワイルドその人であつたが、見やうによつては手品の種明しのやうに興褪めなこの完本獄中記の主人公は、無頼の美少年アルフレッド・ダグラスである。藝術家が生活人に敗北する経過をかくもまざまざと描き出した作品は類を見ない。(11)

「オスカア・ワイルド論」(1950)にもあるように、三島の大きな関心がアルフレッド・ダグラスとワイルドとの事件にあったことは、ここでも示されていると言ってよいだろう。

三島の文章からワイルドに言及したものがいくつある。その中のひとつに次ぎのようなものもある。

少年の最初の読書の選擇は、少なくとも文学書の選擇は、決して偶然といふやうなものではない。自分の未来を自分の手で、鷲摑みしてしまふのだ。それがオスカー・ワイルドと谷崎潤一郎だった。(12)

これは 1965 年（昭和 40）7 月 31 日の「谷崎潤一郎氏を悼む」の中の一節である。ここで『オスカー・ワイルド事典』(北星堂書店)の中の「谷崎潤一郎」と「三島由紀夫」の項目を少し見てみたい。

谷崎潤一郎(1886-1955)については

> ボードレールやポー、ワイルドなどの西欧文学に対する趣向と読書、そこから学んだ表現形式、人生態度や芸術観などが窺える。(13)

とある。谷崎は1910年(明治43)に『新思潮』に「The Affair of Two Watches」を掲載し、その中でワイルドへの言及があり、さらに佐藤春夫、澤田卓爾と『ウィンダミア夫人の扇』を共訳している。その他、作品『刺青』(1910)、『秘密』(1911)、『悪魔』(1912)、『饒太郎』(1914)をはじめ、創作戯曲『信西』(1911)などがよくワイルドの作品と比較されている。

一方、三島については、

> 初期の小説にしばしばアフォリズムを用いた三島は、ワイルドの逆説表現に注目し、逆説は彼の「誠実」の表れであると見る。(14)

との記述がある。谷崎にしても、三島にしてもワイルドとの比較研究が早くから行われているが、三島が少年の頃に手にした文学が谷崎潤一郎とワイルドであったことを考えると、三島の言葉を借りれば「決して偶然といふやうなものではない。自分の未来を自分の手で、鷲摑みしてしまふのだ」ということになるかもしれない。

三島自身がワイルドや唯美主義について触れた文章は決して多くはないが、1949年(昭和24)の「美について」(『近代文学』第4巻第10号、河出書房)、1951年(昭和26)の「唯美主義と日本」(『読売新聞』11月19日)などもある。さらに1951年(昭和

26)に発表した『禁色』などは『ドリアン・グレイの肖像』と比較されるなど、比較文学的観点からの研究も盛んであることは周知の通りである。

1970年（昭和45）11月25日に三島は自刃を遂げるが、この年の5月の三好行雄との対談「三島由紀夫のすべて」(『國文学　解釈と教材の研究』（第5546号）の中で

> 作品の世界は、さっきも申し上げように、かくあるべき人生の姿ですかね。もし、自分が作品に影響されてかくあるべき人生を実現できれば、こんないいことはないわけですけれども、逆にそうなれないというのが、人生でしょ。(15)

この三島の発言はワイルドの以下の文章を彷彿とさせる。

> Life imitates Art far more than Art imitates Life. (16)

これは *The Decay of Lying* からの一節であり、ワイルドの芸術論を支える重要な考え方である。三島は彼のワイルド論はもちろんのこと、他の文章でもワイルドに言及しながら、あるいは、ワイルドの名前は出さずに、上記の芸術論のように、ワイルド張りの芸術論を展開させているのである。

3　三島由紀夫演出『サロメ』

1960年(昭和35)4月、三島由紀夫演出／日夏耿之介訳『サロメ』(文学座)が渋谷・東横ホールで上演された。サロメに岸田今日子(b.1930)、ヨカナーンに仲谷昇(b.1929)の配役である。三島が日夏の翻訳を使用し、サロメに岸田今日子を抜擢したのは、岸田今日子の父、岸田國士(1890-1954)の存在が運命のようにこの

ふたりを引き合わせたのである。(このあたりの背景については、井村君江『「サロメ」の変容　翻訳・舞台』から知ることができる。[17])

三島の『サロメ』演出については1961年（昭和36）の『美の襲撃』(講談社)、1966年（昭和41）の『三島由紀夫評論集』(新潮社)、1975年（昭和50）の『三島由紀夫全集』(第29巻)（新潮社）などに収録された。さらに1960年（昭和35）の「座談『サロメ』と三島由紀夫その舞台」(『古酒』第3冊）などもあるが、それによると三島のサロメ像は「spoiled child」[18]であった。さらに、舞台背景も黒と白のモノクロームのビアズリー調による幕開きが印象的であったと言う。対談は1990年(平成2)の『「サロメ」の変容――翻訳・舞台』(新書館）にも再録されている。三島の演出意図については、まず1960年（昭和35）1月のプログラムの中で幕間についての指摘がある。

> 「サロメ」は長すぎる一幕物であるが、一晩の芝居としては短かすぎる。私は幕間を一度挿入しようと思ふ。どこで幕間になるかはまだ言へない。[19]

次いで4月のプログラムでは以下のように述べている。

> さて、長すぎる一幕物であるため、私はサロメの踊りの前に幕間を入れた。能でいふと、この踊りを境にして、サロメはいはば、前ジテと後ジテにわかれるからだ。そのほか能や狂言の手法をいろいろ演出に使つてみたが、「サロメ」といふ芝居の、内容も静的な構成もさういふ手法にふさはしく思はれたからである。[20]

さらに、演出イメージがすべてオーブレイ・ビアズレイからのインスピレーションであったことから、

> 今度の「サロメ」は、十九世紀のオリエンタリズムを、その裏側の極東の目から見たものにしたいと考へた。白黒の装置と衣裳の間に、琥珀色の肌と漆黒の髪が居並ばなければならぬ。(21)

としている点も興味深い。

三島由紀夫が『サロメ』上演について、ビアズレイにこだわっていたことはドナルド・キーン氏宛の書簡からも伺える。

> ビアズレエそっくりの舞台装置で、岸田今日子がサロメをやり、豪華絢爛たる舞台でした。しかし、退屈で、演出は失敗であるといふ評判をとりました。(22)

と、昭和 35 年(1960)4 月 21 日付けの書簡に淡々と書き綴っている。

「三島由紀夫とワイルド」については、1972 年（昭和 47）年の越川正三「三島由紀夫のワイルド論」(『商学論究』第 19 巻第 4 号，関西学院大学)、1977 年（昭和 52）の先田進「三島由紀夫とオスカー・ワイルド――習作期におけるワイルド受容」(『日本文芸論稿』第 7 号，東北大学文芸談話会)、1979 年（昭和 54）の山口哲生「オスカー・ワイルドと三島由紀夫についての覚え書」(『和光大学人文学部紀要』第 13 号）などの研究論文をはじめ、まとまったものとしては、1992 年（平成４）の堀江珠喜『薔薇のサディズム：ワイルドと三島由紀夫』(英潮社）も出版されている。三島はかつて、島村抱月（1871-1918）が美学研究から松井須磨子を主

演に『サロメ』上演（芸術座）を実現させたように、三島も、岸田今日子を主演に『サロメ』上演（文学座）を実現させたことは、サロメに対するイメージと女優といった実際の上演でも強いこだわりがあったことがわかる。三島由紀夫演出『サロメ』は日本の戦後のワイルド劇上演の先駆的な役割を果たしたのである。

エピローグ

戦後の最初のワイルド受容の大きな山は 1950 年（昭和 25）のワイルド没後 50 周年であったと言える。1960 年（昭和 35）までの 10 年間に三島はワイルド論を発表、さらには『サロメ』上演も果たしたのである。三島の「オスカア・ワイルド論」(1950) 以前のワイルド研究と言えば、研究論文では木村亀二「イギリス行政改革史のエピソード――オスカー・ワイルド」(『刑政』特別号、矯正協会、1949 年 4 月)、「文学と社会的背景――オスカー・ワイルドの社会主義」(『表現』第 2 巻第 7 号、角川書店、1949 年 8 月) くらいのものである。戯曲は読むものではなく、演じられて初めて魂が吹き込まれる。三島は芸術家として『サロメ』を日本の舞台に復活させた第一人者と言ってよいだろう。

注

(1) 福田恆存「幽霊やしき」(『少年少女』第 4 巻第 12 号、中央公論社、1951 年 12 月)、p.81.

(2) 三島由紀夫「オスカア・ワイルド論」(三島由紀夫『三島由紀
夫全集』第 25 巻、新潮社、1979 年 10 月)、p.335.

(3) 三島由紀夫「ラディゲに憑かれて――私の読書遍歴」(『三島由紀夫全集』第 27 巻、新潮社、1975 年 7 月)、p.211.

(4) 安藤武『三島由紀夫の生涯』(夏目書房、1998 年 9 月)、p.136.

(5) Ibid., p.241.

(6) 中里壽明「三島由紀夫のギリシア体験」(富田仁編『異文化との出会い』三修社、1986年12月)、p.183.

(7) 斎藤順二『三島由紀夫とその周辺』(教育出版センター、1980年5月)、p.68.

(8) 三島由紀夫「オスカア・ワイルド論」、p.335.

(9) Ibid., p.337.

(10) Ibid., p.349.

(11) 三島由紀夫「完本獄中記——ワイルド作」(『三島由紀夫全集』第25巻、新潮社、1979年10月)、p.413.

(12) 三島由紀夫「谷崎潤一郎氏を悼む」(『三島由紀夫全集』第32巻、1975年7月)、p.42.

(13) 井村君江「谷崎潤一郎」(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月)、p.524.

(14) 佐藤秀明「三島由紀夫」(『オスカー・ワイルド事典』)、p.537.

(15) 三島由紀夫・三好行雄対談「三島由紀夫のすべて」(『國文学　解釈と教材の研究』第5546号、学燈社、1970年5月)、p.14.

(16) *The Complete Works of Oscar Wilde* (Collins, 1990), p.992.

(17) 井村君江『「サロメ」の変容　翻訳・舞台』(新書館、1990年4月), pp.232-264

(18) 井村君江『「サロメ」の変容　翻訳・舞台』, p.276.

(19) 三島由紀夫「『サロメ』の演出について」(『三島由紀夫全集』第29巻、1975年7月)、p.488.

(20) 三島由紀夫「わが夢のサロメ」(『三島由紀夫全集』第29巻)、p.516.

(21) Ditto.

(22) 三島由紀夫『三島由紀夫未発表書簡　ドナルド・キーン氏宛の 97 通』(中央公論社、2001 年 3 月)、p.63.

キーワード：ワイルド、三島由紀夫、谷崎潤一郎、サロメ